

## 書籍紹介

中原, 朝子  
神戸大学男女共同参画推進室 : 特命助教

保坂, 雅子  
東北大学男女共同参画推進センター : 助教

<https://hdl.handle.net/2324/7358017>

---

出版情報 : ポリモルフィア. 1, pp.132-140, 2016-03-31. Office for the Promotion of Gender Equality, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



# 『福澤諭吉とフリーラヴ』 慶応義塾大学出版会 2014 年

西澤直子著 慶応義塾大学出版会 2014 年

保坂雅子

東北大学男女共同参画推進センター 助教

本書は慶應義塾福澤研究センター教授である西澤直子氏が、日本社会の近代化が進む過程の中で福澤諭吉が家族をどのような集まりとして捉え、そこにどのような機能を期待したかを検討することにより、近代家族像が持つ一面を明らかにしようとするものである。福澤諭吉の女性論および家族論を研究テーマとする著者は、同じく慶應義塾大学出版会から『福澤諭吉と女性』(2011年)という本書の姉妹版ともいべき著作を出版している。

紹介するまでもないが、慶應義塾大学の創設者として知られる福澤諭吉(1835～1901)は、『学問のすゝめ』や『文明論之概略』等の著作を持つ明治の啓蒙思想家である。幕末に3度、西洋諸国へ渡航した福澤は、開国後も日本が独立国家であり続けるために国民1人ひとりが精神的・経済的に自立する文明社会を目指すべきであると考え、男女平等を前提として個人の独立や権利を論じた。

長い著作活動を通じて自らが主宰する新聞の社説等において女性の自立と男性の意識改革の必要性を主張した福澤は、特に明治20年前後および明

治31年の民法制定時に『日本婦人論』『日本婦人論後編』(明治18年)、『男女交際論』『男女交際余論』(明治19年)、『日本男子論』(明治21年)、『女大学評論』『新女大学』(明治32年)等の体系的著作を著した。家族に関しては、女性論において結婚や離婚、家庭内での役割分担等について議論する以外にも、個人の独立を支える家庭教育や経済活動の場として論じた。

福澤の女性論・家族論については、これまでも議論の限界や実践との一貫性の欠如が指摘されてきた。著者は、福澤や周囲の人物の著作や書簡、インタビュー記録等を利用し、当時の政治的、社会的状況や同時代人の言論も参考としつつ、実際家であったと評される福澤の思想を多角的に検証することを目指した。全6章から構成される本書は福澤諭吉に限らず、明治という時代に関心を持つ読者にとって興味深い内容となっている。

著者はまず、第1章から第3章において、福澤が目指した近代的な家族像とその機能の検討を通して家族の二面性を明らかにする。個人主義が発達

した西洋社会における家族を理想とする福澤は、家族とは、対等な関係にある独立した男女が情により一対一で結びついた集合体であると考えた。江戸時代までの封建的な「家」とは異なる彼の家族観は当時としては先進的なもので、政策的には近代化を進めながらも儒教主義を奨励していた明治政府が構想する家族像と相いれなかった。このような福澤ではあったが、自由愛情（フリーラブ）による結婚を理想の形としながらも、「偕老同穴」として安易に離婚することを否定した。そして、国民が支配される対象から国家の主体となるにあたって必要となる個人の独立を実現するために、家族が倫理教育を行い、家業として経済活動を行うことを期待した。

「一夫一婦」「偕老同穴」による結婚を扱った第2章第4節および家族の機能を扱った第3章は本書の核ともいべき個所であり、読み応えがあった。特に、福澤自身も関わった彼の出身地である大分県中津市における士族階級の「家」や経済活動への従事に関する意識改革の難しさを説明した部分は興味深かった。

第4章および第5章では、交際によるネットワーク形成と女子教育に関する福澤の思想および関連する実践を扱い、彼の理想と実践とが結びつかなかった以下の状況を紹介する。まず、地方在住者も含めた交際の促進を目的として明治13年に設立した交詢社には女性は含まれていなかった。次に、福澤の妻や娘を主人として開催したパーティーは、福澤やその知人の人脈を活用した交際の場にとどまり、女性が主体的に行う交際の実現という点からみて不十分なものであった。そして、

福澤家や親戚・知人の娘を主たる対象として慶応義塾の活用や宣教師の雇用により試みた女子の教育は、いずれも長続きしなかった。

著者は、福澤が自分に最も近い家族であってすら自らの理想を実現できていないという従来の批判はもっともであると述べた上で、社会において女性に対する根強い偏見があり、女性が男性と交際し教育・訓練を受け、更には職業に就くことが困難であった時代においてはやむを得なかったのではないかと推測している。加えて、当事者である女性自身の主体性も彼の理想の実現を妨げた原因の1つとして挙げる。「旧時代の象徴」とも言われた格上の家出身の妻錦との間で社交や子育て・結婚に関する意見の違いがあったことについては『福澤諭吉と女性』でより詳細に紹介されている通りである。著者が主張する通り、女子教育の実現が困難な時代であったかもしれないが、福澤が中津市学校設立に教員派遣等により協力し、士族の経済活動への参加推進にも尽力したことを考えると、女性の自立に関する彼の実践は消極的であったと言わざるを得ない。

福澤の家族論を主題とする本書において、著者が第4章および第5章で個人としての自立を可能にするネットワーク形成や女子教育について扱っている理由は、家族における対等な夫婦関係を実現するにあたって女性の自立が不可欠であると考えたためか、あるいは福澤の家族論と実践の不一致を議論する必要性があったためかと思われる。いずれにせよ、内容的には興味深いものの最終章とのつながりが弱く、本書の主題からみると独立した2つの章としてまで取り上げる必要はなかった

のではないかという印象を持った。

さらに言えば、家族論との関係で福澤の実践を検討するのであれば、交際や女子教育ではなく、既婚者も含めた女性の「家族との関係における自立」を扱った方がよかったのではないだろうか。『福澤諭吉と女性』では、福澤家における子女の教育や結婚に関する妻錦の積極的関与や金銭管理面での夫婦の協力等が扱われていた。本書においても、女性の教育や交際、労働に関する父母の介入や夫婦関係の継続に関する妻の意思決定への関与等についての実践を扱う方が一資料が存在すればの話ではあるが一適当であるように思われた。

最終章では、先行する章で指摘した福澤の家族論の問題点について、個人主義と家族主義の視点から改めて議論し総括している。著者は、福澤が個人主義に基づく新しい家族観を持っていたにも関わらず家族の継続のために個人よりも家を優先させ、家族の機能を前提とすることで個人を家族に内包させている、という従来の批判に同意した上で、福澤の主たる関心が実際の女性の権利にあったことや、当時の儒教主義的家族観の根強さ等を指摘して、やむを得ないものであったと主張する。福澤の思想の根幹にかかわる部分—社会は発展するという文明論に基づいた見方や、法や制度ではなく人々の習慣や考え方が社会を変革させる上で重要であるとの考え—によって家族論における矛盾や変遷を説明している部分には納得させられた。

最後に、福澤の家族論に内在した近代化の過程における普遍的課題として、性別役割分業、参政権

付与、相続、家族の機能、家族国家論、生物学的性差の解消、理想の具現化を挙げてまとめとしている。いずれもが納得がいく課題ではあるのだが、本書で扱っている内容との関連性の高さから考えると、性別役割分業、相続、家族の機能、理想の具現化の4課題に焦点をあてて掘り下げて議論した方が本書の価値を高めることにつながったのではないかと残念に思った。

福澤の著作に加え、実践や行動の記録を資料とし、彼の家族論の背景となる明治の政治、経済、教育、家族等に関する社会的背景や同時代人の思想も扱う本書は、読者が福澤の家族論を理解するのを助け、家族論における矛盾や変節を安易に非難することを戒めてくれる。福澤の思想だけでなく私生活や人となりを知ることでもできる本書は、明治期の思想や福澤諭吉をよく知らない読者にとっても無理なく読める優れた入門書であるといえる。

ただ、先行研究の引用が多く、注釈で記述すべきと思われる内容が時には数段落にわたって本文中に含まれている点は、最終的には理解の助けとなるものの、読者の注意を本題から逸らす恐れがあるとの印象を持った。読み物としての面白みという点では、『福澤諭吉と女性』と比べて劣るかもしれない。また、幕末から明治30年代にかけて30数年にわたって書かれた福澤の家族論を検討の対象としているため、思想の変遷を辿ることが難しかった。関連する著作の時系列リストが巻末にでもあれば、時間軸に沿って思想を理解することが容易になり、多様な資料を数多く駆使しているが故の読みづらさが多少解消されたのではないだろうかとも思った。